

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析*

鈴木 博之

四郎翁姆

オスロ大学

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、文芸理論、昔話、証拠性

1 はじめに

未記述言語の記述言語学的研究に際して、民話などの口承文芸を記録し分析することは、不可欠な作業である。記述言語学的研究においては、音形式の記述と分析、語釈、行間訳の提供が一般的に要請されるが、口承文芸の構造や文学的特徴については、言語研究者の仕事として解釈や分析を行うことが必要とされているようには見えない。筆者はこれまでカムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による口承文芸の記述と分析を行い、その作業を通じて、昔話の語りというスタイルの中に自然発話とは若干異なる特徴を見出した。その一部は Suzuki & Sonam Wangmo (2017bc, 2018ab) で発表した。この分析の基礎には印欧語における語りや物語の分析がある。語りの分析に関する問題は、言語記述に直接的にかかわるものと、文体・語りの技術にかかわるものに分けられるが、両者は密接に関連している。つまり、口承文芸の構造やそれにかかわる言語学的特徴は、当該言語そのものの構造を明らかにするのに示唆的である。このため、文学の構造分析に関する知識が詳細な言語特徴を明らかにする上で役立つことは、想像に難くない。

それでは、口承文芸の構造に通言語的な特徴が存在すると言えるだろうか。このような疑問に対し、小澤 (1998:12-15) は「昔話には共通する語法がある」とまとめている。これは、著者が Lüthi (1947) によるヨーロッパの昔話の分析を踏まえ、日本の昔話を検討した結果、両者に類似性を認めたことによる。この見方がいずれの言語文化圏の昔話においても適用可能かどうかは検証を待つ問題であるが、Lüthi (1947, 1975) や小澤 (1998) の述べる特徴を記述対象となる諸言語について検証を進める作業は、単に言語学的分析の正確性を高めるだけでなく、民話の普遍性と個別特徴を分離して理解できるようになることが期待される。たとえば、倉部 (2018:118-119) はジンポー語の民話と日本の民話の類似性を指摘しているが、文学の構造分析の角度から見ると、さらに1歩進んだ指摘ができる可能性がある。

本稿では、筆者がこれまで記述してきた Lhagang 方言の物語を、Lüthi (1947) と小澤 (1998) の観点に基づいて見直し、Lhagang 方言の物語が共通する「語法」をもつことを確認し、また、語りに用いられる特別な文法特徴について、複数の物語を対照しつつ明らかにする。

* 本稿の一部は中国少数民族文学與文献國際學術論壇（四川師範大学、2018年）および言語記述研究会第92回会合（京都大学、2018年）において口頭発表したものを組み合わせて発展させたものである。

2 Lüthi (1947) に基づく Lhagang 方言の昔話の分析

本節では、まず事例研究として Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) で発表した昔話『王様のぶた』について、全文和訳を掲げ、物語の流れを把握したうえで、Lüthi (1947) の指摘する物語の普遍的な構造的特徴について分析する。そののち、Lhagang 方言の他の物語から、先の分析を補完する。

2.1 『王様のぶた』：全文和訳

Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) で言語学的訳注を施した原文に従って和訳したものを掲げる。原本から意味段落に区切ってあるため、本稿でもそれに従う。

*

*

*

[1] むかしむかし、あるところに王様の一家がおりました。彼らはとても豊かな家庭でした。ある1匹のぶたが、王様の屋敷の牛糞をためておくところ¹にいました。そのぶたは、それはもう大きなぶたでした。あるとき、王様の牛たちがすべてやってきて牧場に向かおうとしたとき、王家の人が放牧に行こうとしたときのことです。あるゾモ²がいました。名前をトンラダといいました。それから、1人の老僧が牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしていました。

[2] その人、その老僧が、王様のお屋敷の門をじっと見ていたその時、あるゾモの首に濃い青色のトルコ石がかかっているのに気がつきました。そのゾモはトリマといいました。そのときです、トルコ石が下に落ち、道に落ちました。するとすぐにもう1頭のゾモが来て、その上に糞をしました。老僧はそれを見るや否や、そこへ駆け寄り、指で糞に印をつけました。トルコ石がある場所に印を残したわけです。

[3] それから、老僧は牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしていました。すると、ある日のこと、老僧は一晩中眠れませんでした。というのも、あのぶたがずっとブヒーブヒー鳴いて、牛糞をためておくところの土を絶えず掘り起こしていたからです。ぶたが土を掘り起こすことに老僧はそれはそれは腹を立てました。しかし、ぶたは王家のものです。どうであれ、ぶたは牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしているのです。どうしようもありません。

[4] すると、そこに王様の侍女が駆け下りてきました。侍女はひとかたまりのゾモの糞を拾い上げました。その中には、あのゾモが落としたトルコ石が入っている糞もありました。そして、それらを壁に貼りつけました³。侍女がゾモの糞を壁に貼りつけたちょうどその時、老僧はとても幸運なことに、すぐに壁際へ駆け寄り、また印をつけました。そして、侍女がゾモの糞を貼りつけ終えました。それから、牛糞をためておくところで、老僧は座ったり眠ったりしました。

[5] それから、王様の息子、つまり王子が病気になってしまいました。王子の病気はとても重

¹ ごみ捨て場のような場所をさす表現。

² 雄ヤクと牝牛の子（雌）。

³ 牛糞は壁に貼りつけて乾燥させ、燃料とする。

く、死にかけていました。そこで、王家の人々は多くの儀式を行いました。神託師を呼んで神託をしてもらい、占い師を呼んで占いをしてもらいましたが、王子の病気は治りませんでした。

[6] すると、ある夜、王子の父親が言いました。「牛糞をためておくところに老僧がいるが、あの人は何か知っているかもしれん。ちょっと行って尋ねてきてくれ。」すると、王家のある人が老僧のところに行って尋ねました。「おい、なんか知っているか？王子がじきに死にそうなんだ。」老僧が言うには、『『ぶたの頭をひっくり返す儀式』のほかは、何も知りません』と。そこで、このように言いました。「どうやって『ぶたの頭をひっくり返す儀式』を行うのだ？」すると老僧は、「まず大きなぶたの頭を切り落とすのです。そうした後、そのぶたの頭で王子を治すのです」と言いました。王家の人が何度尋ねても、老僧は『ぶたの頭をひっくり返す儀式』以外何も知らないと言いつけました。そこで、王家の別の人が言いました。「トルコ石を身につけたゾモのトリマもなくしてしまった。王子もじきに死にそうだ。老僧も何もできないとは。」そして、もしも老僧ですら何もできないと言うのなら、それはもうかわいそうなことです。なぜなら、王家の人はすでにぶたの頭を切り落としてしまったのです。王子のためにぶたを殺したのです。これらすべてが老僧の過ちによることになってしまうのです。

[7] すると、老僧は思いました。トルコ石を身につけたゾモのトリマはいなくなってしまうた、明日も何もできない、さらに王子を治すこともできない、とこのように考えました。そこで老僧は灰色の草を一握り引っこ抜き、それから厠へ行きました。下の辺りにある厠へ行くと、王様の侍女がこのように話すのをこっそりと聞きました。「王子が病気になったのは王様の侍女のせいだ。」それから、それは老僧が草を引っこ抜いた王家の丘のせいでもありました。また、褐色の野ヤクもいて、そのの行いによって物事がうまくいかなかったのです。さらに、老僧はこっそりと聞き続けていて、老僧が下の方の厠で聞いたことには、「今本当に悪いことになってしまった。私たちは明日にはもう終わり。『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で絶対私たちのことが分かってしまう。あのぶたが殺されてしまったんだから。」侍女は「じゃあどうする？」と言うと、丘は「あ、このことは『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で絶対に分かってしまうに違いない。あの老僧はこうやって駆け寄ってきて、おれの髪の毛を、あの草を全部引っこ抜いて去っていきやがった」と言いました。それから、褐色の野ヤクも『『ぶたの頭をひっくり返す儀式』をやるときに、老僧はおれに向かって『悪魔の褐色の野ヤク』と口走り、ひと蹴りしていきやがった。おれのことを言っているに違いない』と言いました。すると、3人のうちの1人が「じゃあどうするんだ？」と言いました。それに答えて、1人が「丘の上で悪魔の褐色の野ヤクに180斤の丸太を負わせて、それから侍女を焼き殺せ」と言い、続けて「そうすれば王子の病気も治るし、トルコ石も『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で見つかるだろうし、すべてがうまくいく」と言いました。

[8] すると、老僧はとてもうれしくなって、下の方から駆け上がってきて、あの老人、つまり老僧はこのように座ったり眠ったりしました。そして次の日、国王の侍従が言いました。「我々はどうすればいいのでしょうか？」「そうですね、ではこのようにしましょう。悪魔の褐色の野ヤクに180斤の丸太を負わせて、それからヤギ1頭と同じくらいの大きさの鳥の巣を作って、そ

こに王様の侍女を放りこみ、焼き殺すのです。」老僧は続けて言いました。「すると王子の病気は治るでしょう。それからこうです。私はゾモのトリマのトルコ石を探し当てることを約束しましょう。そうなれば王様の半分の領地をもらいたい。」王様の一家はみな喜びました。「我々は明日、悪魔の褐色の野ヤクに 180 斤の丸太を負わせ、丘の上でかがり火をたき、その上で侍女を焼き殺そう。そうすれば、王子はすぐに回復するのだ。」それから、老僧はぶたの頭を持って、こうやって1つ1つの牛糞を指しながら、知らないふりをして「これかな？これかな？これかな？」と言いました。でも、トルコ石のある場所はすでに老僧が印をつけているでしょう？こうして老僧は「これだ！」と言って、トルコ石を見事に掘り出したのです。

[9] こうして、王様は老僧に王様の領地の半分を与えました。王様は老僧のために領地の半分を失いました。こうして老僧はとても喜びました。老僧が言うには、王様は自分に領地の半分を与え、さらに自分の像を仏壇に供えてくれたのです。こんなふうには、とても運のいい人と言うのは、このような人を指すのです。

2.2 Lüthi (1947) の昔話の構造理論

ここでは、先に掲げた『王様のぶた』について、Lüthi (1947) の述べる昔話の構造理論が当てはまるかを見ていく。

議論に先立ち、Lüthi (1947 [2005:77-80])⁴ は口承叙事文学をいくつかの種類に分け、そのうち、昔話に属するものについて主要な議論を展開しているということに注意喚起しておきたい。すなわち、Lhagang 方言の文脈において、『王様のぶた』が昔話であるとみなすことができ初めて、議論が成立する。Lüthi (1947 [2005:78]) では、「昔話 (Volksmärchen)」と対照的な口承文芸として、「伝説 (Sage)」と「聖伝 (Legende)」を挙げ⁵、昔話とどのように異なるのかを述べている。結論として、以下に述べるような点から、Lhagang 方言の『王様のぶた』は、Lüthi のいう「伝説」でも「聖伝」でもなく、「昔話」と考えて妥当である⁶。

Lüthi (1947 [2005:8-75]) は、「昔話」を時に「伝説」と比較しながら、次の5つの性質によって特徴づけている。

1. 一次元性 (Eindimensionalität)
2. 平面性 (Flächenhaftigkeit)
3. 抽象的スタイル (Abstrakter Stil)
4. 孤立 (Isolation) と全結合性 (Allverbundenheit)
5. 昇華 (Sublimation) と世俗性 (Welthaltigkeit)

⁴ 本書には邦訳がある (小澤 2017)。ただし、以下で鍵となる用語に言及する場合、原版のドイツ語を吟味して筆者の責任で訳したものを掲げる。

⁵ チベット文化圏における聖伝が何に相当するのかは考察の必要があるが、ひとまずここでは本生譚 (ジャータカ) の類を想定し、本稿では深く立ち入らない。また、これら以外に「神話」というジャンルも区別される。チベットの神話としては、Bringsværd og Braarvig (red.) (2000:287-306) に創世神話の部分翻訳がある。

⁶ 昔話と伝説の違いについては、3.2 で概説する。

これらの特徴は、ヨーロッパの昔話だけにとどまらず、日本の昔話にも適用されることを、小澤 (1998) が明らかにしており、言語や地域を問わず昔話には共通の構造があるという見通しを述べている。それではチベット文化圏の場合、より厳密には Lhagang 方言の場合はどうであろうか。結論から言えば、以上の5点はすべて『王様のぶた』において確認される特徴である。1点ずつ解説していきたい。なお、文中にある [] で囲まれた数字は、2.1 で示した全訳の段落番号である。

「次元性」とは、昔話における登場者は「こちら」の世界（人間の世界）と「あちら」の世界（幽霊や鬼などの世界）の間の隔たりがないというように理解できる。『王様のぶた』では、超人間的な登場者はいないものの、「口をきくゾモ」や「口をきく丘」が登場する [7]。老僧は廁で彼らの話を盗み聞きするが、彼らが人間の言葉を話すことに対し、驚くことはない。もしこれが伝説であれば、人間以外の登場者が口をきいたら一大事である。このようなことが起これば、驚嘆の対象となり、語り継がれていくものである。Lhagang 方言の物語の中で「伝説」に属するものに、鈴木ほか (2015) で記述した物語『菩薩の愛する地・塔公』があるが、その中で仏像が口をきいたことに対して、人々はみな特別畏敬の念を抱いている。

「平面性」とは、昔話に登場する者や事物に深みがない、すなわち実体の伴わない図形であるというように理解できる。『王様のぶた』に出てくるぶたは「非常に大きい」ということが述べられている [1] が、それ以外には何の記述もない。どんな色⁷で何匹で暮らしているのか⁸も分からない。老僧は物語の前半では座ったり寝たりしている以外に、生活上の行動についての描写がない [1, 2, 3, 4]。事物については、トルコ石が出てくる [2, 4, 6, 7, 8] が、なぜゾモの首にこのような高価な装飾品⁹がつけられているのか説明がない。現象について見てみると、ぶたの首を切り落とす場面がある [6] が、詳しい描写に欠け、その過程についての一切の言及がない。

「抽象的スタイル」とは、昔話の登場者から物語の進行まで、すべてを簡潔に、物語の進行に重要なもののみが言及されるというように理解できる。『王様のぶた』の物語の進行もまったくその通りで、必要でない話題は一切認められない。「ぶたが非常に大きい」という描写 [1] は、その鳴き声で老僧をいらだたせる [3] のに必要な不可欠な条件であるから、余計な形容ではなく、物語を進めるうえでの一部として機能している。王様の屋敷についても、裕福だとは述べている [1] が、実際どれぐらい大きく、何人が暮らしているのかといった情報はない。ぶたの首を切り落とす場面 [6] においても、流血したはずではあるが描写がない。これらはみな、物語には不必要な要素であるからといえる。

「孤立と全結合性」とは、以上に述べた要素が示すように、登場者はそれ自体が孤立したものとして見える形で特徴づけられ、この特徴がある一方で、見えないところでそれぞれがつなが

⁷ チベット文化圏を視野に入ると、ぶたは黒いと考えるのが通常である。Suzuki & Sonam Wangmo (2017a) には塔公村にいるぶたの写真が掲載されており、確かに黒いことが分かる。

⁸ 『王様のぶた』に類似する昔話は、チベットの各地に存在する。その中で、複数の類似の昔話、たとえばチベット自治区ギャンツェ地方の語り (O'Connor 1906:158-165) や雲南省徳欽地方の語り (林繼富主編 2016:358-359) などにおいて、ぶたは複数匹登場する。

⁹ チベット文化圏において、トルコ石は高価な装飾品（宝石）として認識される。

り、1つの物語として調和していく特徴があるというように理解できる。『王様のぶた』の「王様」「老僧」「トルコ石」などはそれぞれ孤立した存在であるが、それらが組み合わさって物語を形成していく。また、物語は繰り返しをよく伴う。『ぶたの頭をひっくり返す儀式』についての説明は2度 [6]、侍女をいかに処刑するかについては3度 [7, 8] 現れている¹⁰。また、Lüthi (1947 [2005:45]) も指摘しているが、孤立化の傾向は悪人に与える刑罰を悪人本人に言わせる点にあると述べ、それは『王様のぶた』においても、侍女をいかに処刑するかについて初めて述べる箇所 [7] で類似の構図が認められる。

「昇華と世俗性」とは、昔話に現れるモチーフが個性を失い、重みのない透明な図形として描かれる一方、世俗的な素材も吸収するものであり、Lüthi (1947 [2005:75]) は「昇華したモチーフはもはや現実そのものではないが、現実を代表する」と結んでいる。『王様のぶた』には老僧が出てくるが、チベット文化圏の現実世界に僧侶は存在し、かつ社会的地位の高い人物とみなされているが、物語においては牛糞をためるところで生活している [1]。それに対して、聞き手は無礼であるとは感じない。確かに、現実世界に素材を求めることができるが、それはすでに昔話におけるモチーフとして昇華し、現実世界とは異なって理解されると考えてよい。逆に、現実世界との異なりを前提として認めるからこそ、「王様」が存在できることにもなる。「王様」に対応する Lhagang 方言の形式は、チベット文語形式の *rgyal po* に対応し、それ自体 Lhagang 方言の文脈では「王様」ではなく「土司¹¹」のほうが的確な訳語であるが、このような現実を必ずしも昔話に投射する必要はないのである。

2.3 Lhagang 方言の他の物語の事例から

2.2 に見たように、Lüthi (1947) の昔話の構造理論は Lhagang 方言の昔話にもうまい具合に当てはまるものである。Lhagang 方言の昔話について、さらに一般化して考えるために、ほかの昔話についても先に述べた点を中心に考えていきたい。ここで言及される昔話には、『雲雀になった王子の妻』(Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)、『3羽の鳥』『雲雀とシャコ』(Suzuki & Sonam Wangmo 2018b)、『白いゾモ』『うさぎと虎』『羊と狼』(Suzuki & Sonam Wangmo forthcoming) がある。

「一次元性」については、すべての昔話において認められる。すなわち、登場者は人間であってもなくても人間の言語を話すし、幽霊の類が出てきても登場者が驚くことはない。「平面性」もまた同様であり、登場者の描写は簡潔で必要なこと以外は言及されない。「抽象的スタイル」について見ると、典型的な動物会話型の昔話である『うさぎと虎』『羊と狼』は会話が物語の軸となっているため、説明的な事柄も含むが、それ以外の物語は、物語を進めるのに必要な事柄だけでうまく筋だてができています。

「孤立と全結合性」については、『王様のぶた』よりも典型的なスタイルを『雲雀とシャコ』や

¹⁰ しかし、まったく同じように述べていない点では、繰り返しの典型例ではない。

¹¹ 明代以降、漢族による周辺異民族の管理体制について、各地域における非漢民族の領主、管理者を指す。

『白いゾモ』に認めることができる。物語の中で、モチーフがほとんど言い方を変えることなく「3度」繰り返されるのである。Lüthi (1947 [2005:38-59]) で言及される多くのヨーロッパの昔話にも、「3」が現れる。これについて、Lüthi (1947 [2005:33]) は「抽象的スタイル」の項で、昔話の定式について「3」が支配的であるとも述べている。『雲雀とシャコ』では、3つのエピソードが、それぞれ内容を変えながらも語り口は同じ形式を保ったまま連続して現れる。『白いゾモ』の場合、3姉妹がいて、それぞれ同じ質問を発するさまが語られる。物語の展開は、これら3つのエピソードが終わった後、独立して行われる。このことは、それぞれのエピソードが孤立していて、かつ全体として結びつき、昔話の定式の定式に収まっていることを示している。

「昇華と世俗性」は『虎とうさぎ』や『羊と狼』に明確な形で見て取れる段がある。『虎とうさぎ』では、うさぎが虎に目玉がおいしいとうそをつき、自分で自分の目玉をくりぬくよう仕向ける場面があるが、これらの出来事は単なるエピソードになっており、痛みを伴ったり聞き手に痛みが伝わるように語られはしない。『羊と狼』においては、主人公である羊の親子が狼から身を守るために、偽の皇帝の勅書を読み上げるくだりが描かれており、この背景には平民が皇帝の勅語を恐れるという世俗的特質が存在する。

以上に述べたように、Lhagang 方言のさまざまな昔話についても、Lüthi (1947) の構造理論はよくあてはまると言える。物語において、Lüthi (1947) の指摘する特徴のいずれが明瞭に現れるのかという点について、異なりが認められる。

3 語りにおける Lhagang 方言の言語特徴：非感知完了を例に

筆者は、Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) の『王様のふた』の分析において、鈴木、四郎翁姆 (2016) の文法スケッチを踏まえて、語りに現れる特定の文法現象があることを指摘した。これらは他の物語においても類似して現れるため、「語りの文法」なるものが存在すると考えて問題ないであろう。問題は、記述言語学的にこれをどのように取り扱えるかである。チベット系諸言語の中には、語りにおける特別な形式が存在するものがあり、たとえば、Koshal (1979:205-207) におけるラダック語の ‘narrative forms’ がある。ただし、この例は語りにのみ用いられる形式であり、他のカテゴリーの形式が語りのときに異なる意味をもつというのではない。

本節では、「語りの文法」が自然発話やアンケートでは出てこない原因について、昔話の文学的特徴と構造を踏まえつつ、「非感知完了」の用法をその事例として取り上げて検討してみたい。また、先行研究で検討しなかった「語り (narrative mode)」は「昔話」に限定される特徴であるかどうか、という問題についても検討する。ここで注意しておきたいのは、語りの専用の形態統語論的体系があるということではなく、特定の語りにのみ適用される語用論上の解釈があるという点を想定していることである。

3.1 非感知完了とは

チベット系諸言語は、形式に異なりが認められるとしても、一般的に証拠性を形態統語論的に標示する体系を備えている (Tournadre & LaPolla 2014, Tournadre 2017, Suzuki et al. 2018)。

Lhagang 方言の動詞接尾辞は、TAM 標示と証拠性標示を同時に示す体系をとり、鈴木、四郎翁姆 (2018:37) は語彙的動詞の接尾辞を表 1 のようにまとめている。この分析は Oisel (2017) を参考にしているため、伝聞を表に組み込んでいない。詳細は 3.6 を参照。

表 1 : Lhagang 方言の動詞接尾辞の証拠性標示 (平叙文肯定形)

TA \ 証拠性	向自己	判断	感知	推量	推定
非完了	V-lə ji:	V-lə re?		V-s ^h a re?	
	V-li:				
未来	V- ^{fi} go	V- ^{fi} go re?	V- ^{fi} go ^h sã-çə 'ji:-tu		V- ^{fi} go-s ^h a re?
継続	V-jo?	V-jo? re?	V-ji:-tu	V-jo?-s ^h a re?	
進行	V-çə jo?	V-çə jo? re?	V-çə ji:-tu	V-çə jo?-s ^h a re?	
習慣		V-re?			
アオリスト	V-zə ji:	V-zə re?		V-zə 'ji:-s ^h a re?	V-jo?-s ^h a re?
完了		V-k ^h e:	V-t ^h e:		

このうち、注目する対象は最下段の「完了」の「判断」に位置する /-k^he:/ という形式で、特に問題になるのは、これとアオリストの用法との対照である。本稿で「非感知完了」と呼んでいるのは、完了の形式が感知ともう 1 つしかないためである。証拠性の体系を重んじるならば、このカテゴリーは「判断完了」と呼ぶべきである。

完了とアオリストについては、Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) で後者の用法を重点的に記述した。その際に完了も引き合いに出して解説を試みたが、あくまでもアオリストとの対比において見るにとどまった。鈴木、四郎翁姆 (2018:34-35) では、調査票を用いた聞き取りに基づき、完了の用法を次のように記述した。

- 発話内容の動作を感知したか否か

(1) a ʔ^ho-φ ʔza ma-φ ʔle:-t^he:
 3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.SEN
 彼はごはんを作りました。(作った現場を目撃して)

b ʔ^ho-φ ʔza ma-φ ʔle:-k^he:
 3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.NSEN
 彼はごはんを作りました。(作った現場は目撃していない)

- 発話者自身の行為について、意図的でない行為を述べる場合

(2) a ʔa ma: ʔŋa-gə ʔçã ljɔ-φ ʔt^hã tçe? ʔ^hlu?-t^he:
 INTJ 1-ERG 調味料-ABS すべて 入れる-PFT.SEN
 あっ、私は調味料を(間違っ)すべて入れてしまいました。

b ʔa ma: ʔŋa-gə ʔçã ljɔ-φ ʔt^hã tçe? ʔma-^hlu?-t^he:
 INTJ 1-ERG 調味料-ABS すべて NEG-入れる-PFT.SEN
 あっ、私は調味料を(間違っ)すべて入れていませんでした。

- (3) a 'ŋa ts^ho-φ -^{fi}go-φ -^{fi}dzɛʔ-k^he:
 1.PL-ABS 門-ABS 閉める-PFT.NSEN
 私たちは門を（開けておくべきだったのに）閉めてしまっていました。
- b 'ŋa ts^ho-φ -^{fi}go-φ 'ma-^{fi}dzɛʔ-k^he:
 1.PL-ABS 門-ABS NEG-閉める-PFT.NSEN
 私たちは門を（閉めるべきだったのに）閉めていませんでした。

以上が日常の会話において最も典型的に現れる完了接辞の用法である。

ところが、筆者は昔話の語りにおいて非感知完了に異なる機能があることを報告し、また、通常 TA を標示しない判断動詞と存在動詞についても、語りにおいては非感知完了接辞が付加されることも特別であることを述べた (Suzuki & Sonam Wangmo 2017b)。これは語りの中でも昔話でよく用いられるものであり、『王様のぶた』をはじめ、『雲雀になった王子の妻』および『白いゾモ』『うさぎと虎』『羊と狼』において、非感知完了の/-k^he:/は物語の第1文に出てくる。それぞれ次のようである。

- (4) 『王様のぶた』『雲雀になった王子の妻』

'ni ma 'fi na: ^{fi}na-la 'dza: po ʔtɕ^hɔ ts^hɔ 'hɕiʔ-φ ^joʔ-k^he:
 むかしむかし-LOC 王 家族 1-ABS EXV-PFT.NSEN
 むかしむかし、王様の一家がいました。

- (5) 『羊と狼』

'ni ma 'fi na: ^{fi}na-la ʔluʔ 'ma wu -^{fi}ni:-φ ^joʔ-k^he:
 むかしむかし-LOC 羊 母子 2-ABS EXV-PFT.NSEN
 むかしむかし、お母さん羊と子羊の2匹がいました。

- (6) 『白いゾモ』

'ni ma -^{fi}na: ^{fi}na-la ʔp^ha ri ʔk^hɔ mba 'tə la -^htɕa tso: tsoʔ-φ
 むかしむかし-LOC 対岸 家 こんな 縦長の-ABS
 ^joʔ-k^he:
 EXV-PFT.NSEN
 むかしむかし、対岸にこんな縦長の家がありました。

- (7) 『うさぎと虎』

'ni ma -^{fi}na: ^{fi}na-la 'rə qo: -^htɕiʔ-φ ^joʔ-zə ji:-k^he:
 むかしむかし-LOC うさぎ 1-ABS EXV-AOR-PFT.NSEN
 むかしむかし、うさぎが1匹いたのです。

以上の例文はすべて昔話の第1句であり、非感知完了接辞はすべて存在動詞/^joʔ/に後続している。(7)ではアオリストと完了が並列される例であるが、このアオリストは存在したということ強調したいときに現れると記述できる。形態上問題なのは、/^joʔ/という動詞語幹、そしてアオリスト/-zə ji:/ともに、形態上は「向自己」の証拠性をもつように見える点である(表1参照)。この形態的特徴は、しかしながら、語釈に示したように、向自己(E)の標示を行っておら

ず、筆者の記述において向自己の意味はないと解釈している¹²。

さて、昔話の第1句は常に非感知完了接辞がつくかということ、実際はそうではない。

(8) 『3羽の鳥』

ʼca ^h ka:	ʼh ^h tciʔ-φ	ʼ ^u dzo: mo	ʼh ^h tciʔ-φ	ʼte:	ʼqə tɕə ru
灰色のがちょう	1 -ABS	雲雀	1 -ABS	それから	[固有名詞]
ʼze:- ^h dzu	ʼh ^h tciʔ-φ	ʼjoʔ reʔ-zə reʔ			
言う-NML	1 -ABS	EXV-HS			

灰色のがちょうが1羽、雲雀が1羽、それからクチュルという鳥が1羽いたそう。

(9) 『雲雀とシャコ』

ʼni ma ^h na: ^h na-la	ʼ ^u dzo: mo	ʼh ^h tciʔ-φ	ʼjoʔ reʔ
むかしむかし-LOC	雲雀	1 -ABS	EXV

むかしむかし、雲雀が1羽いました。

(8) では伝聞の証拠性が標示され、(9) にいたっては日常会話と同じように、判断の証拠性が標示されている。これらの形式は、証拠性を標示しなければならない文法体系をもつチベット系諸言語において、もっともよく用いられる語りの形態であり、Lhagang 方言でもそうである。

3.2 昔話と伝説の違い

口承文芸を考えると、内容によってさまざまなジャンルに分かれる。この中で、昔話と伝説は決定的に異なる体系をもつ。要点としては、昔話は「架空の物語であることを前提に話す」のに対し、伝説は「過去に本当に起きたことであるから信じてほしいように話す」と言える（小澤 2017:297 参照）。伝説の類については、Lhagang 方言のもので参考になるのは『菩薩の愛した地・塔公』（鈴木ほか 2015）で、『裸麦の種子の由来』（鈴木、四郎翁姆 2017）についても、語りの上では伝説に近い。これらに用いられている証拠性の標示は、以下のようである。

(10) 『菩薩の愛する地・塔公』

ʼni ma ^h na: ^h na-la	ʼ ^h dza ^h za	ʼkō dzo-φ	ʼpoʔ-la	ʼja la	ʼ ^h de t̥ō
むかしむかし-LOC	PSN-ABS		チベット-LOC	上へ	迎える
ʼ ^h kaʔ-la	ʼ ^h ō ʼ ^h dza po-gə	ʼk ^h o-la	ʼt̥co wo-tciʔ-φ		
とき-LOC	PSN-ABS	3-DAT	PSN-NDEF-ABS		
ʼ ^h z̥i-zə reʔ					
与える-AOR					

むかしむかし、文成公主がチベットへ迎えられるとき、唐の太宗が彼女にジョウオをあげました。

¹² 他のチベット系諸言語では、「推量」と「推定」の証拠性の形式において向自己の形式を含むものがあるが、それら自体に向自己の意味があるかは別である。この点について、アムドチベット語の事例を Tsering Samdrup & Suzuki (2018) が扱っている。

(11) 『裸麦の種子の由来』

ˈni ma ˈna ˈna-la ˈdza: po ˈpu zə-tciʔ-φ ˈjoʔ-reʔ

むかしむかし-LOC 王子-NDEF-ABS EXV

むかしむかし、王子がいました。

『菩薩の愛する地・塔公』の語りは、伝説の部分とそれに基づいた解説の部分の2種からなる。前者の部分について、ほぼすべての文に伝聞の証拠性接辞/-zə reʔ/が現れており、語る内容が実際に起こった出来事であることを聞き伝えたものである、ということを用意して語られていると解釈するのは、おそらく正当であろう。(10)で挙げたのがアオリストの判断の証拠性形式であるのは、それが歴史的事実であり、語り手が事実であると判断して、意図的に判断の証拠性を選択していると言える。『裸麦の種子の由来』については、鈴木、四郎翁姆(2017)でも言及したが、伝聞の証拠性接辞を用いず、また非感知完了も現れないという構造になっている。

Lhagang 方言では、昔話の類に特に非感知完了が出現する。伝説においては、先に述べたように、伝聞の証拠性が標示されることが多い。伝聞の証拠性は、語られる内容が実際に起きたことを直接示すことはないが、他人もまた語っている、ということを示す点で、発話の信ぴょう性を上げる効果があると言える。「聞いたことであるから信じてほしい」というように語ろうとしていると考えて問題ないであろう。これは、伝聞の証拠性が聞き伝えという情報源を明示するという客観的機能に対する、日常会話の記述においては自身の考えに基づかない、すなわち発話内容への判断に責任をもたないと理解されるのとは対照的である。それゆえ、信ぴょう性を上げたいとする伝聞標識の用法も「語りの文法」と考えてよいであろう。

ここで、小澤(2017:297)の昔話と伝説に対する語り方についての考えは、特定の言語においては形態統語論上の特徴として明示される、と言えるのではないだろうか。当然のことながら、このことは、証拠性を明示する体系をもつ諸言語において、昔話と伝説がどのように語られ、どのように語り分けられるのかを広く検証してみなければ、一般的な解釈として成立するものであるかどうかは明言できない。そのためには、口語を口語として記録し、適切な枠組みで分析する必要がある。Lhagang 方言においては、「非感知完了」の意味を正確に記述し、以上の仮説が的確に説明できるか検証する必要がある。

3.3 非感知完了の語りにおける用法：背景の提示

Suzuki & Sonam Wangmo (2017b)の『王様のぶた』では、語りにおいて特に用いられる非感知完了(nonsensory perfect)の動詞接尾辞/-kʰe:/について指摘した。発話について証拠性を標示することが極めて強く要請されるチベット系諸言語において、昔話に現れる証拠性の体系がいかなるものであるかは、非常に重要な問題である。

昔話は現実から切り離された世界で完結する。それゆえ、語り手は現実世界と接点をもたず、語りによってのみ物語の世界を表現しなければならない。昔話の本質は、余計なものがなくかつ必要最小限のもので構成される(Lüthi 1947 参照)。言い換えれば、すべての内容が筋の上であり、脱線しない。しかしそれでも、情報的には背景と筋が区別される。昔話の導入句は、たいてい(日本語の場合)「むかしむかしあるところに」であり、それは物語に必要な背景情報を

提供する(時間設定=「昔」という時間;場所設定=「あるところ」という場所)が、これらは背景であって筋(プロット=出来事)そのものではない。

Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) は、非感知完了が背景を表しアオリストが筋を表すというスタイルがあることを述べた。ここで同じ例をあげて、非感知完了に注目しながら解釈することにする¹³。

(12) 『王様のぶた』

- [1] 'te: 'tə-φ ʰtɔ: ji ˀmbo lo? ˀgo-la ˀne:ne:
それから あれ-ABS 牛糞をためるところ 上-LOC 眠る-CONJ
ˀnduʔ-zə ˀji:kʰe:
座る-AOR-PFT.NSEN
それから、彼(老僧)は牛糞をためるところの上で寝たり座ったりしました。
- [2] 'tə ˀla ˀgɛ-tə-φ ˀzaʔ hʰtɕiʔ tə ˀpʰaʔ ˀgɛ-gə ʰho-φ ˀpʰu gə la
それから 老僧-DEF-ABS 一晩中 ぶた-ERG 3-ABS 全く
ˀne: ˀma-hʰtɕuʔ-zə reʔ
眠る NEG-CAUS-AOR
それから、その老僧なのですが、一晩中ぶたが彼を眠らせませんでした。
- [3] ˀfiã-ta ˀfiã ˀze: ʰtɔ: ji ˀmbo loʔ-φ ˀja:kʰo
INTJ-COM INTJ 言う 牛糞をためるところ-ABS DIR-掘る
ʰtɔ: ji ˀmbo loʔ-φ ˀja:kʰo-zə reʔ
牛糞をためるところ-ABS DIR-掘る-AOR
「ぶー」また「ぶー」と鳴いて、牛糞をためるところを掘り上げ、また牛糞を
ためるところを掘り上げました。
- [4] 'te: 'tə ri ˀdə reʔ ˀja:kʰo-kʰa-te ˀla ˀgɛ-φ ˀtsʰiʔ kʰa ˀza-kʰe:
それから そのように DIR-掘る-時-TOP 老僧-ABS 怒る-PFT.NSEN
ˀtsʰiʔ kʰa ˀza
怒る
それから、こんなふうでした。(ぶたが)掘り起こすちょうどそのとき、老僧は
怒りに怒りました。

以上の連続する文(12[1]-[4])において、非感知完了は[1]と[4]に現れ、いずれも老僧の動作、状態を表している。以上に現れる非感知完了は、実際のところ、アオリスト系動詞接尾辞(/-zə, -zə ji:, -zə reʔ/)と対比され、語りにおいて重要な役割を担っている。この点は Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) で明らかにしたことであるが、昔話の語りに用いられるアオリストはテンス・アスペクト以外の機能があるということが挙げられる。それは、物語の進行を担う動作について、アオリストが選択される傾向にあり、非感知完了が多くの場合、物語の背景を描写する際に用いられるというものである。語り手はぶたの行為に重点を置く描写を行っていて、

¹³ ここでの行間訳は 2.1 で訳出したものとは若干異なり、直訳に近くしてある。

この場面を進めていくのはぶたであることを明示していることになる。

Lhagang 方言のアオリストと非感知完了の関係は、まさにフランス語書記言語の単純過去と半過去の関係に酷似する。この半過去は「描写の半過去」(朝倉 1955:180-181) と呼ばれ、「継続と同時性を表すために、中心となる行為の背景ともいべき状況や、人物の性格・風貌・心理の描写に用いられる。単純過去が事件の継起を物語る説話の時制であるのに対し、半過去は絵画的な描写の時制である」とする(朝倉 1955:180)。むしろ筆者は Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) において、フランス語のこの関係を参照点に、Lhagang 方言の現象を見たのである¹⁴。

それでは、背景部分に位置する老僧の行為は物語の筋には位置しないのかということ、そうではないことは上に述べた。昔話であるならば、その構成部分は最小限であるから、当然のことながら老僧が牛糞をためるところで生活し、ぶたの行為に腹を立てるのは、昔話そのものとして、また物語を進めるうえで不可欠な要素である。しかし、この場面において、老僧の行為は物語そのものを動かす要素ではないことに注意すべきである。以上の解釈は、昔話の構造と言語の構造の双方が絡んでいる。昔話の構造が分からない限り、アオリストと非感知完了がテンス・アスペクトそれ自体の意味するものとして解釈され、それはすなわち結果として語りの構造を正しく理解していないということを意味する。

3.4 語りにおける非感知完了の意味

非感知完了は、日常会話において特に「感知によって得た情報ではないことに基づく」という証拠性を表し、必然的に感知と対比して理解される。(2) と (3) の異なりは、(2) は自分のしてしまった行為に五感のいずれかによって感知したことが発話の意図として現れている一方、(3) は五感で感知していないことが発話の意図として現れている。「門を閉めていなかった」という事実は、発話者が直接確認したことで初めて閉め忘れていたことを知ったのではなく、それ以外の情報によって知りえたということを述べている。それでは、昔話を語るにあたって、非感知完了が特に物語の背景を語る時に現れるのはなぜだろうか。そもそも語りにおける非感知完了はいったい何を「感知していない」のか。

昔話は語りの中でその世界を構築する必要があり、その背景を設定する際に明確に非感知完了が用いられていることが(4)-(7)で確認されている。これに対応して、アオリストは物語を前進させる機能がある(10)。アオリストは、形態的に向自己(-zə ji:)、判断(-zə reʔ)、そして証拠性を言明しない(-zə) という3種の形態をもち、形態論上はテンス・アスペクト部分と証拠性部分に分析できる。共時的な記述において、このように分析することの妥当性については、なお議論の余地があるものの(Zeisler 2004 参照)、アオリストは証拠性を言明しない/-zə/という形式がある¹⁵という事実から、アオリストには行為が起きたことがまず第一義にあり、それを

¹⁴ 類似の現象は、イタリア語にも認められる。イタリア語では遠過去と半過去の関係に近いと言えるが、その文学における用法は細かく言えばフランス語とは異なりがあるようであり、単純に対照できる問題ではない。小林(2001:163-190)を参照。

¹⁵ 特に諾否疑問文の応答に用いられるなど、/-zə/単独の形態が特定の証拠性と関連しているとは判断できない。

どう理解するかが問題となっている。感知の証拠性の形態を欠いていることから考えても、どうやって情報を得たかは問題にされていない。あくまでも行為が行われたことに焦点が当たっている。それに対し、完了は行為の行われた結果状態に焦点が当たっているのであり、その意味では出来事の背景を述べるのにふさわしい形式であると言える。しかし、昔話の中で構築される世界にあっては、その出来事を五感のいずれかによって感知することはできない。思考によって生み出されたものに対しては、感知によってアクセスするのではない。このことは、推量 (sensory inferential) と推定 (logical inferential) が形態論的に区別されることが多いチベット系諸言語の証拠性の枠組みからも想定できることである。それゆえ、感知完了の形態は使用できず、必然的に非感知完了の接辞を用いることになる。

語りにおける非感知完了は、究極的には「感知に関知しない完了」——すなわち「事態が完了し成立しているという判断」であるといえるのではないだろうか。そもそも日常世界と切り離されて語られる昔話において、感知の有無は議論できない。実際のところ、「判断完了」は日常会話の実例から見ると受け入れがたい用語になり、体系上は判断の証拠性に含めて記述できるが、実例からは「判断」とは言いがたい点もあった。それゆえ、体系上は判断完了であっても、非感知完了という用語を用いてきた。しかし、昔話の語りを考慮するにあたって、/k^he:/を「判断完了」と呼ぶのはふさわしいということである。

しかしながら、以上の結果を受けて、/k^he:/の語釈において PFT.NSEN と表記しているのを PFT に変更する必要があるかどうかは、日常会話における用法も参照しつつ、慎重に考える必要がある。

3.5 非感知完了が用いられない昔話について

先に (8, 9) で問題提起したように、昔話であっても非感知完了が用いられない事例が存在する。Suzuki & Sonam Wangmo (2018b) で扱った 2 編の語りのうち、『3羽の鳥』には 1 度も /k^he:/ は現れず、『雲雀とシャコ』では 1 度のみ現れるという点について、どのように解釈できるだろうか。これら 2 編では、各発話の動詞句末接辞には判断もしくは伝聞の証拠性接辞が用いられ、特に「これは物語である」という証拠性標識を用いずに、普通に会話しているような語り口で物語を進めている。実際のところ、これは語り手個人個人の語り口の異なりである、と考えられないだろうか。確かに、『3羽の鳥』と『雲雀とシャコ』は、それ以外の語りとは異なる語り手によるものである。どのように物語を構築するか、という点については、個人差の存在を認める必要があるとはいえないだろうか。

もちろん、個人差が存在するというのは否定できないが、(8) で伝聞の標識が現れる点については、証拠性それ自体の意味をとることができると言える事情がある。それは、Suzuki & Sonam Wangmo (2018b) で特に注記したように、この語りは語り手が物語の内容について忘れた部分が多く、思い出しながら語っていることと関連がある。すなわち、語り手が昔話としての物語の空間を構築していくというプロセスがなく、単に「このような話であったと聞いたことがある」ということを、単に伝聞であるという情報源について伝聞の証拠性標識を用いて表

した発話といえる。つまり、(8)の伝聞標識は3.2で述べた、伝説を語るときに現れる「語りの文法」としての使用法ではなく、日常会話における伝聞標識の使用法として解釈できる、ということである。このように考えることで、昔話の第1句に伝聞標識が現れるという不規則性を説明することができる¹⁶。

それでは、判断の証拠性を標示するのはどういった要因が考えられるだろうか。これについて考察を加えるにあたり、対置されるアオリストについて見てみたい。アオリストは昔話以外の語りではどのように用いられているだろうか。『菩薩の愛する地・塔公』では、語りのほとんどが「アオリスト+伝聞標識」で現れ、「語られる内容が順々に起こったと聞いている」というように述べている。翻訳調ではあるが『裸麦の種子の由来』(鈴木、四郎翁姆2017)でもアオリストがほとんどの動詞句末に現れる。これは、もとの語りがほぼすべて筋のみで構成されているからであり、背景を述べた個所がほとんどないためである。しかし、『雲雀とシャコ』の場合をみると、地の文の場合「アオリスト+伝聞標識」がよく用いられる。この昔話は、会話が軸になっている語りであるため、背景の描写が必要とされない。「だれだれが『～』と言いました」の「言いました」の部分が背景にはならず、物語の進行そのものになる。このように、会話のやりとりで物語を進められることが非感知完了を用いない大きな理由ではないかと判断する。

以上に見たことを総合して考えると、非感知完了とアオリストの使用は、昔話を語る上で場面と筋を対比する効果があり、言語構造上やはり意味のある差異であると見るのは妥当である。一見個人差のように見えるそれらの使用方法の差異は、語りの内容の構造上要請される特徴である可能性も否定できない。それゆえ、現段階では、個人差であると明言することは難しい。参照すべき資料はまだ十分ではなく、さらに多くの語りを収集することで明言できるようになると考える。

記述言語学において参照文法をできるだけ自然発話や語りの資料に基づいて記述するという方法があるが、Lhagang方言をはじめ、チベット系諸言語について適用する場合、証拠性およびそれに関連する箇所を記述する際には、以上に述べたような問題点が存在するという点について、よく考えておかなければならない。

3.6 それでもなお問題は残る

以上の解釈によって、昔話の語りにおける非感知完了の機能については明らかになった。しかしながら、形態論的に1つの問題が残っている。それは(7)のように、「アオリスト+非感知完了」のような形態が現れる問題である。加えて、(4, 5, 6)のように、存在動詞に非感知完了がつくというのは、日常会話では見当たらない構造をとっている。いずれも、形態統語論上の問題である。「語りの文法」というカテゴリーを認めたとしても、構造上の問題が説明できていないのである。

¹⁶ ここに述べたことが正確であるならば、(8)の行間訳はいささか不適切である可能性もある。「～だそうな」は昔話の定型句として訳出したのであって、ここで行った解釈のとおりになると、「～がいたと聞いた」「～がいたんだっけ」などととるのが適切であるだろう。

以上の状況に対して、昔話の語りにおける非感知完了 $/-k^h e:/$ が、ほかの TA の接辞と異なるスロットに入っている形態である、と考えれば、形態統語論上の問題は解決できることになる。TA の接辞に後続できるのは、伝聞標識である。このような接辞のスロットの差異は、多くのチベット系諸言語でも認められる。このために Oisel (2017) は、伝聞が証拠性の 1 カテゴリーであることを認めながら、それを議論から除外している。それでは、Lhagang 方言の $/-k^h e:/$ が伝聞の証拠性標識であると考え、不都合はあるだろうか。

この問いに対して、記述言語学的な観点からは、次のような特徴を指摘することができる。まず、「完了+語りの伝聞」すなわち $/-t^h e:-k^h e:/$ も $/-k^h e:-k^h e:/$ も未確認であり、伝聞標識 $/-zə reʔ/$ がすべての動詞および動詞接尾辞に後続できるのと異なり、分布に制限が認められる。また、伝聞標識に 2 種類を認めた場合、 $/-zə reʔ/$ は制限なく用いられ、 $/-k^h e:/$ は語り専用であり、他に機能をもたないと記述する必要がある。加えて、 $/-k^h e:/$ は語りにおいて伝聞であるが、日常会話では非感知完了であるという記述は、1 つの形態素が担う意味区分として統一のないものになる。これらの点から、 $/-k^h e:/$ を伝聞標識と考えるのは、本節で述べた分析と比べて優れていると判断することは困難である。しかし、スロットが異なるという見方については、例を多く収集して検証する価値があるだろう。

4 記述言語学における昔話の記録と再話：まとめに代えて

本稿では、筆者がこれまで収集・分析してきたカムチベット語 Lhagang 方言の昔話を素材として、Lüthi (1947) の示した昔話の構造における普遍性が認められるかを検証し、それとともに、その分析が記述言語学にとっても有益であることを述べた。昔話は、現実世界と断絶した物語の中で完結する世界を表している。このため、言語構造の中に証拠性が体系的に組み込まれているチベット系諸言語のような言語においては、昔話における証拠性の標示は日常会話と異なることになる。記述文法においては、この点に注意を払う必要がある。

Lhagang 方言の昔話の語り口には、Lüthi (1947) の述べる特徴があると分かった一方で、その語り口自体に、Lhagang 方言の文法特徴である証拠性の標示を規則的に行うかどうかについては、語り手によって分かれる、という結果を得た。これは、昔話を語る枠組みが Lhagang 方言に固定されておらず、あくまでの話し手の語りに対する見方を反映しているものと理解できる。この点において、証拠性の標示は文法体系が要請するものではなく、話者個人の発話態度によってある程度の自由度が存在することを確認した。一方で、昔話の語り口に特定の証拠性標識の使用が認められることも事実であり、それは「語りの文法」として記述するのが適切であると考えた。

本稿の議論と並行し、口承文芸の収集に際し、物語をいかに記録するかという問いについても考えておかなければならない。Lüthi (1947) は、ヨーロッパ各地で収集された昔話を分析するにあたり、記録および記録者の評価も行っている。採録された物語の中には、昔話を昔話らしくないよう編集されているものが存在し、それは 2.2 で述べたような特徴の分析を通して見えてくるといえる。これは記述言語学の分析対象になったときにも考慮すべきである。それでは、

記述言語学における物語の再話はどのように行うべきであろうか。

再話は昔話を後世に伝えるために必要な作業である。狭義における言語資料、すなわち「Lhagang 方言」といった特定の言語が通用する共同体にのみ伝えることを目的とするのであれば、その土地の言語に基づくべきであり、採集できた通りの形式を再現できるように工夫すればよい。しかし、広い意味で、たとえば Lhagang 方言が属するカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群で共有する場合、調整する必要がある。本稿では、再話の具体的方法については記述を割愛する。小澤 (1998:355-367; 2016) の記述を参照されたい。

昔話の記録と記録言語学はまた目的を異にする。録画・録音における言いよどみやフィラーは、果たして記録に必要であろうか。語りにおいて、「間」は重要な役割を担っている。しかし、物語を語り慣れていない人が話を思い出しながら語るときにおける、「えーっと」とった言葉が昔話を構成する要素であるとは言えない。もし昔話を録音・録画して ELAN など字幕をつける形式で記録・保存する場合、言いよどみも文字起こしの対象とすべきであるという意見がある。それは、談話研究など、ほかの研究分野にも役立つからであるという¹⁷。しかし、それが物語の一部でないということには注意する必要がある。語りを進めるシグナルは、それとは別にある。「それで」「それから」といった要素が該当し、これらは物語の一部を占めると考えてよいものである。

聞き手とのやりとりは、しかしながら、物語を進めるうえで機能的である可能性は否定できない。聞き手による「それから (どうなるの)?」といった一言は、語り手に「昔話」としての特徴を際立たせた語りを生み出す潤滑油になることもある。一方で、『王様のぶた』の第8段落最後のあたりに、「でも、トルコ石のある場所はすでに老僧が印をつけているでしょう?」という箇所がある。これは、Lhagang 方言の言語特徴を見ると、話し手が聞き手に対して直接問いかけていることがわかる (Suzuki & Sonam Wangmo 2017a:158)。しかし、これが物語の一部ではないとまでは断言できない。説明を繰り返すというのは、語りとして自然な形であるためである。

昔話は通言語的に普遍性のある文芸であると言えるかもしれない。それゆえに、昔話それ自体を記述言語学における分析対象とするためには、口承文芸の基礎的知識を学んでおく必要性もあるだろう。

¹⁷ Peter Austin との個人談話 (2018) に基づく。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記（物語の語り手の音体系に従った拡張版）

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

cC_iGVC

このうち C_i （初頭主子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 C_iV を音節の最小構成とみなすことができる。

・子音

主子音（ C_i ）位置に現れる要素の一覧は以下のようである。口蓋垂音系列をもつ話者もいる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	(q ^h)	
	無声無気	p	t	t̥		k	(q)	ʔ
	有声	b	d	d̥		g	(g)	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h			
	無声無気	ɸ	s	ɕ	ɕ	x		h
	有声		z		ʒ	ɣ	(ʁ)	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ		
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w			j			

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

i u ɯ u
e ə o
ɛ ɔ
a ɑ

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している

・超分節音素

語単位として、次のピッチパターンが認められる。

ˉ：高平

ˊ：上昇

ˋ：下降

ˊˋ：上昇下降

略号一覧

1	1 人称	DEF	定標識	NML	名詞化
3	3 人称	DIR	方向接辞	NSEN	非感知
ABS	絶対格	ERG	能格	PFT	完了
AOR	アオリスト	EXV	存在動詞	PL	複数
CAUS	使役	HS	伝聞	PSN	人名
COM	共格	INTJ	間投詞	SEN	感知
CONJ	接続語	LOC	位格	TOP	主題
CPV	判断動詞	NEG	否定		

参考文献

- 朝倉季雄 (1955) 『フランス文法事典』 白水社
- 小澤俊夫 (1998) 『昔話の語法』 福音館書店
- (2016) 『昔ばなし大学ハンドブック』 読書サポート
- (2017) 「訳者あとがき」マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話 その形と本質』 293-297 岩波書店
- 倉部慶太 (2018) 「ミャンマーの『こぶ取り爺さん』: ジンポー語による民話テキスト」『アジア・アフリカ言語文化研究』 95, 181-199. 電子版: <http://hdl.handle.net/10108/92462>
- 小林惺 (2001) 『イタリア文解読法』 大学書林
- 鈴木博之、四郎翁姆 (2016) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』 8, 21-90. 電子版: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/>
- (2017) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』——訳注と語りの特徴——」『言語記述論集』 9, 23-42. 電子版: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000909/>
- (2018) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の述部に標示される証拠性」『言語記述論集』 10, 13-42. 電子版: <http://id.nii.ac.jp/1422/00002000/>
- 鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』 訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』 7, 111-140.
電子版: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000874/>
- Bringsværd, Tor Åge og Jens Braarvig (red.) (2000) *I begynnelsen: Skapelsesmyter fra hele verden*. Gjøvik: De Norske Bokklubbene.
- Koshal, Sanyukta (1979) *Ladakhi grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass.

- Lüthi, Max (1947 [2005]) *Das europäische Volksmärchen: Form und Wesen*, 11. Auflage. Tübingen: A. Francke Verlag. (邦訳『ヨーロッパの昔話 その形と本質』小澤俊夫 訳 (第7版に基づく)、2017、岩波書店)
- (1975) *Das Volksmärchen als Dichtung: Ästhetik und Anthropologie*. Düsseldorf: Eugen Diederichs Verlag.
- O'Connor, William Frederik (1906) *Folk tales from Tibet*. London: Hurst and Blackett. (邦訳『チベットの民話』金子民雄 訳、1980、白水社)
- Oisel, Guillaume (2017) Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16.2, 90-128. 電子版 : <https://doi.org/10.5070/H916229119>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017a) Additional remarks on counting 'one' noun in Lhagang Tibetan. *Studies in Asian Geolinguistics VI—Means to Count Nouns—*, 56-59. 電子版 : https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf
- (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163. 電子版 : <https://doi.org/10.5070/H916233598>
- (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91. 電子版 : <https://doi.org/10.14989/230688>
- (2018a) Aorist in Lhagang Tibetan. *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 877-884. 電子版 : <http://hdl.handle.net/2433/235307>
- (2018b) Two folktales in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams): *Three Birds and Lark and Partridge*. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 13, 131-150. 電子版 : <https://doi.org/10.15026/92954>
- (forthcoming) Three folktales in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: *Sheep and Wolf, White mDzomo, and Hare and Tiger*.
- Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup (2018) *Essential evidential framework of Tibetic languages—Data from Khams and Amdo—*. Paper presented at 46th meeting of Tibeto-Burman Linguistic Circle (Kobe)
- Tournadre, Nicolas (2017) A typological sketch of evidential/epistemic categories in the Tibetic languages. In Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds) *Evidential systems in Tibetan languages*, 95-129. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.
- Tsering Samdrup & Hiroyuki Suzuki (2018) Evidential system in Mabzhi Tibetan of Amdo. *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 913-925. 電子版 : <http://hdl.handle.net/2433/235311>
- Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and aspectual values in Tibetan languages: A comparative*

study. Berlin: Mouton de Gruyter.

林繼富主編 (2016) 《藏族民間故事》 民族出版社

[付記]

本研究に際しては、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722) および平成 29-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774) の援助を受けている。

Documentation and analysis of folktales: Case study in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

abstract

This article discusses a theoretical aspect of literature analysis in Tibetan folktales collected in Lhagang Village in Kandze Prefecture (Sichuan, China) by referring to the theory proposed by Lüthi (1947) and Ozawa (1998), and claims that minimum knowledge of literature analysis of folktales is requisite even in a descriptive linguistic approach in order to provide detailed aspects of grammatical phenomena. It consists of two principal topics. The first is a literature analysis of a folktale of Lhagang Tibetan named *King's Pig* (Section 2). The second is a descriptive linguistic issue on 'nonsensory perfect' used in a narrative mode (Section 3).

The article reveals that the way of narrating folktales in Lhagang Tibetan shares commonality to the features clarified by Lüthi (1947). It discusses five features from his theory: 'unidimensionality,' 'flatness,' 'abstract style,' 'isolation and omniconnectiveness,' and 'sublimation and secularity.' All of them appears effectively in folktales of Lhagang Tibetan although we find various degrees of clarity on each feature depending on the folktales.

Concerning the use of /-k^he:/ 'nonsensory perfect,' the article concludes that it functions as 'statemental perfect,' that exactly corresponds to the slot of the tabular of tense-aspect-evidentiality. When /-k^he:/ appears in folktales, it functions as a description of the background information as opposed to aorist which denotes principal actions in a story. This distinction is requisite to compose a folktale from both the perspectives of tense-aspect and evidentiality.

受理日 2019 年 4 月 15 日